

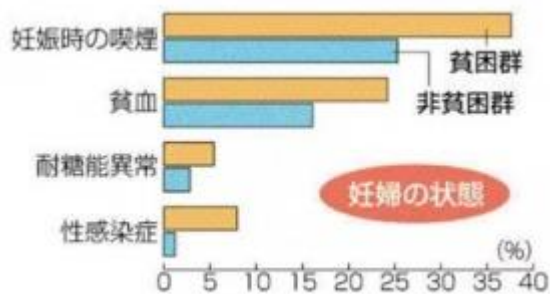
大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

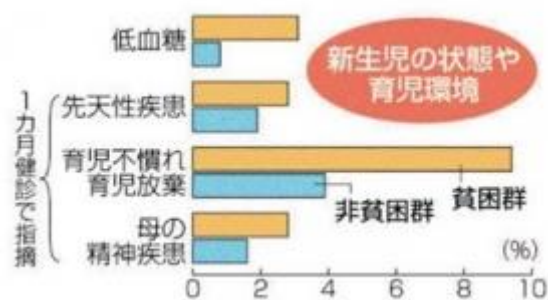
社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3255号 2016.9.14 発行

貧困、胎児に深刻な影響 妊婦の疾病、割合高く 5病院調査

西日本新聞 2016年09月14日



経済的に貧困状態にある妊婦は、糖尿病や性感染症を患っている割合が高く、おなかの子に健康被害が生じる危険性があることが、千鳥橋病院（福岡市博多区）など5病院の共同調査で明らかになった。食の偏りや予防接種を受けないなど、貧困と幼児期に関する調査は行われているが、胎児期から影響を及ぼしていることを示したデータはほとんどない。関係者は、妊娠初期からの早期支援の必要性を訴えている。



調査は2014年4月～15年3月、千鳥橋のほか、あおもり協立（青森市）▽川崎協同（川崎市）▽耳原総合（堺市）▽沖縄協同（那覇市）の各病院で、出産した母親1290人と担当医を対象に実施。このうち収入が判明した677組を、国の基準に当てはめ、貧困群（293世帯）と非貧困群（384世帯）に分けて比較した。

その結果、妊娠時に糖尿病や予備軍の耐糖能異常と診断されたのが非貧困群2・8％に対し、貧困群は5・4％と割合が高かった。貧血も貧困群の24・2％（非貧困群16・1％）で見られた。妊婦の糖尿病や貧血は、早産や子どもの低体重、先天性奇形に影響するとされる。子どもにも感染しかねないクラミジアや梅毒などの性感染症は非貧困群の1・2％に対し、貧困群の7・9％が患っていた。「妊娠時に喫煙していた」は非貧困群が25・3％、貧困群は37・6％。

一方、赤ちゃんの状態は、放置すると脳に障害を及ぼしかねない低血糖が、貧困群で3・1％（非貧困群0・8％）に見られた。低血糖は、糖尿病や耐糖能異常の母から生まれた子に起きやすい症状の一つとされる。体重や感染症の有無に有意差は見られなかった。

1カ月健診では貧困群の14・6％が「問題あり」と診断された（非貧困群8・0％）。内容は、母の育児放棄や育児不慣れが最多の9・4％、母の精神疾患2・8％、パートナーから母へのDV1・0％だった。

貧困群では、中絶歴や10代での妊娠歴がある母親がいずれも4人に1人と高かった。13・7％が母子家庭で、8・4％は結婚歴がなかった。母親の最終学歴は中卒や高校中退が25・4％（非貧困群9・2％）を占め、低学歴が若年出産や未婚での出産といった不安定な育児環境につながっている傾向もみられた。

担当した千鳥橋病院の山口英里医師（小児科）によると、欧米の調査で貧困が早産や低

体重児の可能性を高めることが分かっているが、日本では収入の把握が難しいという。山口医師は「子の健康格差が学力や就労の格差につながりかねない。貧困の連鎖を止めるために、生活改善など妊娠初期からの支援が必要だ」としている。

高齢者や障害者も銀輪を 読売新聞 2016年09月14日
寄贈したタンデム自転車の前で感謝状を手にする石川さん（右）
と鈴木市長（11日）

◆遊水地で貸し出しへ

高齢者や障害者にもサイクリングを楽しんでもらおうと、栃木市の製あん会社経営、石川孝一さん（68）が2人乗りのタンデム自転車2台を市に寄贈し、11日の渡良瀬遊水地フェスティバルで寄贈式が行われた。同市は寄贈された自転車を、10月頃から渡良瀬遊水地のレンタサイクルセンターで貸し出す予定。



石川さんは病気で視力を失い、現在は視覚障害者とボランティアをつなぐ任意団体「D-アイ（出会い）の会」代表を務めている。以前、健常者と一緒にタンデム自転車に乗り、後部座席でペダルをこいだ経験が忘れられないといい、寄贈式では「風を感じて、すごく気持ち良かった。多くの人に楽しんでもらいたい」と語った。

鈴木俊美市長は「視覚に障害がある方だけでなく、足腰が弱くなった高齢の人でも楽しむことができる。渡良瀬遊水地を少しでも多くの人に味わってもらいたい」と話した。

県警交通企画課によると、県内でタンデム自転車が走行できる公道は、道路法で指定されている自転車専用道路の桐生足利藤岡自転車道のみ。そのほかの公道はイベントなどで警察の許可を得たとき以外は禁止されている。渡良瀬遊水地の道路は谷中湖の管理道路で許可は必要なく、タンデム自転車も走行できる。

乗り合いタクシー熊野市全域に 来月2地域でも 読売新聞 2016年09月14日
熊野市の乗り合いタクシーを利用する高齢者



熊野市は交通弱者や公共交通空白地対策として、10月3日から新たに、市内2地域で予約制の乗り合いタクシーを運行する。既存のサービスを合わせると、乗り合いタクシーの運行地域が市内全域に広がり、三重運輸支局によると、県内の市町で初のケースという。（根岸詠子）

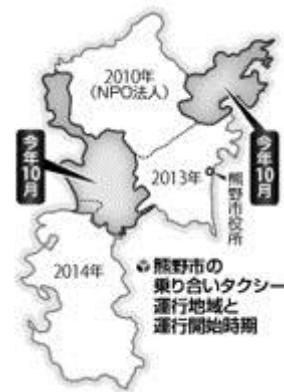
熊野灘に面した沿岸部から山間部まで約370平方キロ・メートルの広さを持つ熊野市は、山々をまたいで52の集落が点在する。

沿岸部はJR紀勢線が走るが、山間部の公共交通機関は三重交通の路線バス（1路線）と市のコミュニティーバス（4路線）に限られ、最寄りのバス停まで車で15分ほどかかる地域もある。2009年に市が実施した調査によると、山間部にある旧紀和町の集落では、自動車運転免許保有率が男性は94%だったのに対し、女性は13%と低かった。

市は公共交通の空白地に障害者や高齢者向けの「福祉バス」を走らせているが、運行は1地域あたり週1、2日に限られ、買い物や通院に不便を感じる高齢者も多いという。

こうした状況を受け、10年には山間部の住民がNPO法人をつくり、運賃が割安な乗り合いタクシー（会員制）の運行を始めた。

市は残る地域を四つに分け、13年と14年に2地域で相次いで乗り合いタクシーの運行



を開始。10月からは残る2地域でも運行することで、市内全域をカバーする。

市の乗り合いタクシーは、民間タクシー事業者の7人乗りワンボックス車などを活用。出発の40分前までに電話予約をすると、自宅から、あらかじめ決められた地域内の診療所や商店、公共施設などに送迎する。運行は土日祝日を除く平日に1日7便で、料金は1回300円（小学生以上）。

市によると、13年に運行を始めた市街地地域では当初、1か月間の利用者が約140人だったが、「使いやすい」との評判が徐々に口コミで広がり、今では約1200人に増加。週2回、体操教室に通うために利用しているという同市木本町の女性（75）は「原付きバイクも乗れるが、雨だと困る。乗り合いタクシーは気兼ねなく利用できて、頼りになる」と運行を歓迎する。

担当する市市長公室の土口泰明さん（31）は、「熊野市は山間部に集落が点在するため、バスを巡回させるのが難しい。高齢者の生活を維持するため、乗り合いタクシーは不可欠」と話している。

乗り合いタクシー 乗車定員が9人以下の営業用自動車で、区域を決めて有料で運行する。県内では熊野市のほか、津、松阪、伊勢、志摩市や多気、南伊勢町でも運行している。

【オリピズム】つなぐ。リオから東京へ（6）もう一つのお祭り パラリンピックが始まる

産経新聞 2016年9月6日
ブラジルの首都ブラジリアをスタートしたリオデジャネイロ・パラリンピックの聖火リレー＝1日（ゲッティ＝共同）

いよいよ、リオデジャネイロ・パラリンピックの幕が開く。売れ行きが懸念されていた観戦チケットも、近づくにつれて販売数が伸びてきたという。

お祭り好きの国民性。オリンピック・ロスがいい形で、もう一つの祝祭に跳ね返っているのだろう。産経新聞リオ支局長の佐々木正明も、「オリンピック成功の勢いのまま盛り上がるのではないかとみている。

盛り上がりには欠かせないのは、やはり観客の声援である。2020年東京も、「全競技場を観客でいっぱいになりたい」と目標に掲げる。日本障がい者スポーツ協会、日本パラリンピック委員会会長の鳥原光憲は、こう話す。「まずファンづくりをしなければならない。とくに小中学生とその家族。限界に挑むアスリートの姿を見れば社会を変える力が働くと思う」

日本財団パラリンピックサポートセンター常務理事の小澤直は、ユニバーサルデザイン普及の一翼を担う株式会社ミライロ社長の垣内俊哉、ライフル射撃の元パラリンピアン田口亜希らと現地でバリアフリー調査を行う。競技会場に向かう未舗装の歩道、仮設施設の段差など、オリンピック開催時に気にかかったポイントを、車椅子に乗るふたりとともに検証していく。

「案内窓口でどんなサポートがなされているのか、競技場での障害者のための観客席の配置や、トイレの位置や数。観客だけではなく、選手にとっても重要な問題だと思う」

試合直前、選手たちはトイレに殺到する。車椅子仕様や介助者も一緒に入ることが可能なトイレは十分、確保されているのか。「アスリート・ファースト」を掲げる東京にとっても、準備のための大事な視点である。

小澤の視線は、ボランティアにも向く。「どんな表情で観客や選手、関係者に接しているのだろう。硬い表情ではサポートされる側が構えてしまう。ごく自然な笑顔でサービスされると受ける方もうれしくなり、いいムードが醸成される。人間の明るさ、懐の深さ。それを確かめたい」

リオのオリンピック成功の背景に、リオ市民の屈託のない笑顔があった。観客やボラン



ティア以外にも、街行く人たちが笑顔でムードを盛り上げていた。

「おもてなし」は、物や形に限らない。心が大切な要素である。人の思いはしぐさ、表情に表れる。心から大会を、試合を楽しみリオの人々のありようを、日本のわれわれも学びとりたい。＝敬称略（特別記者 佐野慎輔）

【オリンピズム】つなぐ。リオから東京へ（7）パラでスポーツ環境づくり

産経新聞 2016年9月13日

リオ・パラリンピックの開会式で入場行進する日本選手団＝7日、リオデジャネイロ（共同）

ちょうど時差は12時間、地球の反対側ではパラリンピックの熱戦が続く。トップアスリートの速さ、強さに改めて驚かされる。

パラリンピックが競技性を強めたのは今世紀からである。障害の度合いで細かくクラス分けされていた種目を合併、再編成された。競技用の車椅子や義足などの改良は、より速く走り、高く遠くに跳ぶことを可能にした。車椅子や義足を使いこなすためにトレーニング方法も進化し、より強くしなやかな肉体を生んだ。

メダルの価値はあがり、プロ選手として競技によって生計をたてるアスリートも増えてきた。パラスポーツが「みる」対象となり、技術向上に拍車がかかる。

そうしたアスリートたちに対し、一般の障害者の意識、関心はどうだろうか。「する」スポーツが置いてけ堀になってはいまいか。

笹川スポーツ財団が実施した『障害児・者のスポーツライフに関する調査』によると、週1日以上スポーツ実施率は7～19歳が31・5%、成人が19・2%、内閣府による世論調査の成人の実施率40・5%と比べてはるかに低い。障害種別では、視覚、聴覚障害の7～19歳が約4割、成人の約2割が週1回以上運動しているのに対し、車椅子が必要な肢体不自由では両ジャンルとも約1割だった。

同財団スポーツ政策研究所研究員の小淵和也は、結果をこう分析する。

「肢体不自由者では、年収が高いほど実施頻度が高くなっており、スポーツの用品・用具等にかかる費用がスポーツ実施の障壁となっている可能性が示唆される」

また実施スポーツでは水泳、散歩、軽い体操の順に高く、水泳は指導・サポートが充実している学齢期に多い。ひとりのできる「散歩」「ウォーキング」が増加傾向にあるという。

注目したい関心については、障害児・者2人に1人が「特に関心はない」と回答、肢体不自由者の3割が「したいと思うができない」と答えた。ここに一つの“訴え”があるかもしれない。環境さえ整えば…。

リオデジャネイロでは、市内の公園に障害者向けの運動器具を設置したり、パラ競技を学校教育のプログラムに導入したり、障害者のためのスポーツ環境づくりが始まっている。パラリンピック効果である。

日本のインフラ整備は進んできた。しかし、施設や指導者など、障害者の「するスポーツ」環境はまだ理想にほど遠い。パラ開催で何かを変えたい。＝敬称略（特別記者 佐野慎輔）



ボッチャ銀・広瀬選手 地元興奮「うれしい感動」 東京新聞 2016年9月14日

リオデジャネイロ・パラリンピックで十三日（日本時間）、ボッチャのチーム（脳性まひ）で日本は、広瀬隆喜（たかゆき）選手（32）＝君津市出身、在住＝の活躍で、同競技初のメダルとなる銀を獲得した。地元関係者の間には喜びが広がり、早くも二〇二〇年東京大会の活躍を期待する声が上がった。

広瀬選手は北京、ロンドン大会に出場したが、メダルには届かなかっただけに、関係者の喜びは大きい。

喜びを語る高城弥生さん＝富津市で

広瀬選手は普段、就労支援施設「ペーターの丘」（富津市）に通所し、パソコンを使ったデータ入力などの仕事をしている。施設長の高城（たき）弥生さん（46）は「うれしい、感動している。広瀬さんの努力を神様が見てくれていたのだと思う」と喜んだ。

テレビの中継がなかったため十三日は、早朝からインターネットで決勝戦の経過をチェック。昼すぎには広瀬選手から「悲願のメダルをチームでとれたことがうれしい」とメールが届いたという。

惜しくも金メダルには届かなかったが、高城さんは「広瀬さんはリオに行く前から東京大会を見据えていた。金は四年後の楽しみにしたい」と話した。

広瀬選手が所属する「市原ボッチャクラブ」（市原市）代表の門脇俊雄（しずお）さん（68）＝市原市＝は「本当にお疲れさま。銀メダルは次につながる。日本として快挙。これまで誰もとることができなかった」とたたえた。

広瀬選手の活躍で、ボッチャへの関心が高まることも期待される。門脇さんは「障害者のスポーツだが、高齢者にも適している。共生社会という流れの中で、健常者も障害者も一緒にプレーできる競技でもある。子供からお年寄りまで楽しめるので、普及にも努めていきたい」と述べた。

君津市の鈴木洋邦市長は十三日、「おめでとうございます。市民に希望や勇気を与えてくれました。広瀬選手の活躍に感動しています。個人戦でも期待しており、市民一丸で応援しています」とコメントを発表した。（北浜修、服部利崇）



ボッチャ「日本がこれほど強くなるとは」



NHKニュース 2016年9月13日
リオデジャネイロパラリンピック球技・ボッチャの団体で日本が銀メダルを獲得したことについて、およそ20年前から国内での競技の普及に取り組んでいる女性は「日本がこれほど強くなるとは思っていませんでした。本当にうれしいです」と話していました。

千葉県市川市の荒井映子さん（65）の長女、育子さん（39）は、生まれつき脳性まひの障害があります。荒井さん親子は、21年前、重度の障害者も参加

できるボッチャの存在を知り、盛んに行われていたイギリスで競技を学びました。

帰国した荒井さん親子は、競技としてのボッチャを普及させようと、よくとくに国内で国際ルールに沿った大会を開きました。それをきっかけに、さらにその次の年に日本ボッチャ協会が設立されたということです。その後、ボッチャの競技人口は徐々に増え、さらに障害者だけでなく、お年寄りや子どもなど障害のない人の間でも楽しめるようになってきたということです。

リオデジャネイロパラリンピックボッチャの団体で日本がこの競技で初めてのメダルとなる銀メダルを獲得したことについて、荒井映子さんは「日本がこれほど強くなるとは思っていませんでした。本当にうれしいです」と話していました。また、今もボッチャの選

手として活躍している育子さんは「ボールをピタッとくっつけるところが楽しくておもしろいです。ボッチャを通じて友達の輪が広がりました」と話していました。

高齢者にも人気

都内には、ボッチャを楽しむ高齢者もいます。

東京・練馬区では5年前に60代の区民を中心に練馬ボッチャクラブが設立され、現在、69歳の男性など8人のメンバーが月1回練習を行っています。クラブによりますと、ボッチャは高齢者でもボールを投げたり転がしたりして気軽に楽しむことができるほか、チームで練った作戦どおりにボールを投げたり、点数を計算したりすることで、集中力も高まるということです。また、専用のボールがあればちょっとしたスペースでもプレーでき、メンバーたちは高齢者施設や児童館などに出向いて、ボッチャの楽しさを広く知ってもらおうという活動にも取り組んでいます。

練馬ボッチャクラブ代表の稲木祐二さん(69)は「誰でも楽しむことができるのがボッチャの魅力です。より多くの人にボッチャを楽しんでもらえるようにこれからも活動していきたい」と話していました。

主将・杉村 ボッチャ初の銀

中日新聞 2016年9月14日



◆地元・伊東 祝福ムード

日本代表を応援する杉村選手の父稔さん(前列左から2人目)と職員ら=13日、伊東市音無町の伊豆介護センターで

リオデジャネイロ・パラリンピックのボッチャ団体で初の銀メダルを獲得した日本代表「火ノ玉ジャパン」。主将の杉村英孝選手(34)の地元、伊東市は祝福ムードに包まれた。

職員三十人が集まった。テレビの生中継がなく、パソコンから事務所の大型スクリーンに映し出したインターネットの得点速報と、現地入りしているセンター社長の稲葉雅之さん(52)からの無料通信アプリLINE(ライン)の連絡を、息を凝らして見守った。

稲葉さんは試合経過や杉村選手の様子を分刻みでセンターに伝えた。「杉村選手、スーパーショット」「日本が円陣を組んでいる」といったメッセージが届くと、事務所には「負けるな」と掛け声が飛んだ。健闘及ばずタイに敗れたが試合終了後は皆で拍手を送った。



庁舎に掲げられた杉村選手を祝福する横断幕=13日、伊東市役所で

杉村選手の父稔(みのる)さん(71)は「メダルを獲得して良くやってくれた。個人戦も頑張ってもらいたい」とねぎらった。同僚で杉村選手の後援会副会長の萩野耕介さん(39)は「テレビ中継がない寂しさはあった。今回の銀メダルがボッチャを多くの人に知ってもらえるきっかけになれば」と話した。

市役所一階ロビーには「杉村選手おめでとう」と書き込まれた横断幕が掲げられた。この日は市内の障害者就労支援施設が合同でパンなどの手作り品を販売するマーケットが庁内で開かれ、運営する堀野真喜子さん(58)は「体が不自由な人たちが勇気づけられる」と喜んだ。

佃弘巳市長は「スポーツに取り組む全ての人たちの励みになる。東京パラリンピックに向け、さらに練習を積んでほしい」と期待を込めた。

(中谷秀樹、杉本三佐夫)

◆内藤コーチが勤務 沼津の施設も沸く

ボッチャ日本代表チームのコーチ内藤由美子さん(40)が勤務する沼津市の障害者支援施設「かぬき学園」でも十三日、喜びとねぎらいの声があがった。

内藤さんは九年前から施設に勤務。作業療法士として機能訓練を担当しながら、利用者たちにボッチャを教えていた。施設では決勝前日の十二日に優勝を祝う長さ五メートルの垂れ幕を手作りして準備した。佐藤正樹園長(60)は「金メダルを期待していたので少し残念だが、内藤さんは私たちの誇り」と話した。

選手、コーチ含め、施設からのパラリンピック出場者は初めて。ボッチャ歴五年という利用者の鈴木尚子さん(56)は「内藤さんが帰ってきたら、強豪国がどんな練習をしているのか聞いてみたい」と話した。(熊崎未奈)

障害者殺傷事件 再発防止策の取りまとめ急ぐ NHKニュース 2016年9月13日



塩崎厚生労働大臣は東京都内で記者団に対し、相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件をめぐる逮捕された男について、事件前の、措置入院が解除されたあとの対応が十分ではなかったと認めたとうえで、再発防止策の取りまとめを急ぐ考えを示しました。

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件では、逮捕された元職員の男は事件の4か月前に「措置入院」をしていましたが、解除されたあと無断で病院を受診しなくなり、相模原市や病院がその後の状況を把握していなかったことが明らかになっています。

塩崎厚生労働大臣は東京都内で記者団に対し、厚生労働省の検討チームが進めていた事件の検証結果の中間報告を14日に公表する考えを示したうえで、「行政も病院も解除後の社会復帰に向けたフォローをせずに、措置入院の解除を認めている問題が大きくクローズアップされた」と述べました。そのうえで、塩崎大臣は「退院後の継続的な医療などの支援が、確実に全国どこでも引き継がれていることが大事だ。制度をそのままにしていた厚生労働省も反省をしなければならない」と述べ、再発防止策の取りまとめを急ぐ考えを示しました。

これに先立って、塩崎大臣は安倍総理大臣と総理大臣官邸で会談し、安倍総理大臣は「検証を踏まえて、新しい再発防止策の策定にしっかり取り組んでほしい」と指示しました。

ASD治療法 確立に光

読売新聞 2016年09月14日

◇香川大グループ

◇原因たんぱく質を発見

対人関係などに問題を抱える発達障害の一つ「自閉症スペクトラム障害」(ASD)を引き起こす原因の一つにたんぱく質の機能不全があることを香川大医学部の山本融教授、徳島文理大香川薬学部の岸本泰司教授らの研究グループが明らかにし、米科学誌「ニューロン」に発表した。ASDの治療法確立につながる可能性があるとしている。

ASD発症の原因として、神経細胞を興奮させる「興奮性入力」と鎮める「抑制性入力」のバランスが崩れ、細胞の活動が過剰になってしまうことは指摘されていたが、なぜバランスが崩れるのかはわかっていなかった。

研究グループは脳の神経を研究するうち、神経を興奮させる細胞間接続「シナプス」の形成を抑制するたんぱく質を発見。たんぱく質の量を減らしたマウスで実験したところ、シナプスが過剰につくられて脳が興奮し▽同じ行動を繰り返す▽ケージに入れたおもちゃなどに通常以上の関心を示す▽他のマウスに無関心——など、こだわりが強い一方でコミュ

コミュニケーション能力が低下するASDによく似た行動を示した。

山本教授は「たんぱく質の働きを生かしてASDの治療薬の開発につながるのではないかと話している。

行政と社協が連携探る 神戸で初会議

神戸新聞 2016年9月14日

意見を出し合う市町や社会福祉協議会の職員たち＝県福祉センター



兵庫県内の市町と各地の社会福祉協議会の職員が集い、地域とのつながりや活動の在り方を考える「市町・市区町社会福祉協議会連携等会議」が13日、神戸市中央区の県福祉センターで初めて開かれた。約100人が参加。熊本地震を受け、災害ボランティアをテーマに、支援を受け入れる「受援」の在り方について熱心に意見を交わした。

ひょうごボランタリープラザが企画した。社協の業務は福祉やボランティアなどと幅広く、日ごろから市町と連携を密にして住民とのつながりや課題を共有しておくことで、有事の対応力を高めるのが狙い。

参加者は、災害ボランティア受け入れについて熊本地震や丹波豪雨の被災地の事例を聞いた後、地域ごとに班に分かれて「地域の強み」などを討論。「高速道路の出入り口が近く、ボランティアが来やすい」「自主防災組織の活動が盛ん」などと意見を出し合った。

室崎益輝・ひょうごボランタリープラザ所長も「災害ボランティアに活躍してもらうには、市町と社協に加え、地域、NPOを加えた4者のネットワークが重要」と訴えた。(阿部江利)

認知症の徘徊防止へペッパー活用 アプリ開発

河北新報 2016年9月14日

エヌ・デーソフトウェアが開発した「徘徊みまもりアプリ」のアイコン



介護福祉関連ソフトウェア開発のエヌ・デーソフトウェア（山形南陽市）は、認知症による徘徊（はいかい）を防止するため、ソフトバンクグループが開発した人型ロボット「Pepper（ペッパー）」向けの「徘徊みまもりアプリ」を開発し、サービスの提供を始めた。

アプリは認知症患者が入所する福祉施設などで、夜間の利用を想定。施設から外出しようとする患者を見つけると、ペッパーが撮影画像とともに宿直職員に通知する。

職員が現場に駆けつけるまで、ペッパーは「こんな遅くに、どこにお出かけですか」「家はどこですか」などと患者に話し掛け、その場に引き留める役割も担う。アプリはウェブサイト「ロボアプリマーケット for Biz」で無料ダウンロードできる。

佐藤博経営企画部次長は「介護分野の人材不足は今後ますます心配される。ロボットを活用し、職員の負担軽減や人手不足の緩和に貢献したい」と開発の狙いを説明する。

ペッパーは相手の表情や言葉から感情を読み取り、行動や会話に反映させる機能を持ち、各種事業所で導入が進んでいる。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行